

油彩

(テンペラ併用) カトレアのある静物を描く③

三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵本賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画「エン・ナーレ」日本の絵画新世代展、両洋の眼「現代の絵画展」21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96~97) 春陽会会員

■油絵具について

ルネッサンス初期の絵には、大変細密に描かれた油彩画があります。これを模写しようとしても、

市販の油絵具では、とても再現できません。これは、絵具自体が異なる成分になっているからです。

実際、私がベルギーでファン・アイクとメモリンクの模写をしていた時も、絵具は自分で練って作らなければなりません。

油絵具の最も基本的な成分は、乾性油です。乾性油は酸素を取り込んで、「酸化重合」という、化学的な変化を起こして固まります。そのため、固まってしまった絵具は、一度とテレピンなどでは溶けません。下の絵具を溶かさずには塗り重ねるためには、この性質がとも都合がよいのです。しかし、いわゆる乾燥(酸化重合のこと)するのには、大変時間がかかります。正確には、100年以上ともいわれています。実際には、触指

乾燥で上乗せしていきますから、2、3日もすれば重ねられますね。

ところが、乾性油だけですと、絵具は固まるまでに流れてしまいます。せつかく盛り上げて描いたものも、翌朝見るとまっ平になってしまふのです。そこで、市販の絵具には、他のいろいろな成分を加えているのです。

その主なものとして、樹脂と蜜蝋があげられます。樹脂には、硬さや接着力の他に、揮発成分が飛んだ時点で固まる性質から、とりあえず動かなくしてしまう目的があります。いわば、鉄筋コンクリート(樹脂)の入っていないコンクリート(乾性油)は、大変脆いものになってしまいます。また蜜蝋は、絵具を盛り上げた時、一時的にその状態を保つためのものです。さらに、有色顔料のほかに、体質顔料という、色味に影響を与えない、無色に近い顔料が加えられています。

これらの添加成分も含めると、全体に占める有色顔料の割合は、大変小さなものになります。つまり、透明度が高いのです。

したがって、古典絵画のようなフラットで、細密な画面を作ろうとすると、盛り上がってしまったら、透明度が強すぎたりと、どうしてもうまくできないのです。言い換えると、盛り上げ、グラッシの技法がとても簡単に行えるように作られているということです。これは、現代の画家たちの需要に応じたものなのです。

この混合技法では、フラットで不透明という、油絵具に不得手な部分をテンペラで行うことになりまふ。まさに、テンペラが得意とする表現ですから。逆に、油絵具には、盛り上げ、透明という表現を担当してもらいまふ。

■絵具の塗り方

テンペラは、いわゆる水彩と同

じ描き方で良いのですが、一度に塗る厚さは、厚すぎないようにします。乾燥による亀裂が生じてしまふからです。厚みが欲しい時は、よく乾かしてから塗り重ねます。

油絵具は、薄く(半)透明に塗りますので、刷り込むように延ばしていきます。特に広い面積を塗る時は、絵具に流動性がないので、かなり難儀を感じてしまうかもしれません。決してメデイウムを多く入れすぎないようにします。

入れすぎは、バルールを壊したり、上に乗る絵具の固着を悪くしたりします。油彩画は、下の層は脱脂上層ほど脂肪分が多く、というのが基本です。

このような場合は、一度多めに絵具を置いてから、叩き筆のようなものでトントんと叩いて絵具を延ばしていきます。

■筆について

この技法で使用する筆は、特にこれだけなければというものはあり



刷毛各種。下地作り、テンペラ、油彩用。



左3点は叩き筆。右4点は水彩筆。



合成筆各種。油彩、テンペラともに適している。



細筆各種。左2つはフランス製。右は穂先の長さが変えられるもので、漆用。

ませんが、フラットな画面づくりを望むなら、テンやイタチなどの柔らかい筆が向いているでしょう。これは、ブタ毛などの硬い筆を使用し、ブラッシュ・ストローク（筆触）の跡が残るからです。

テンペラは、水で溶きますから、水彩筆、デザイン筆、日本画用筆などが利用できます。私の場合、広い面は平筆や刷毛、ハッチングには面相筆のような細い筆を使っています。

油彩には、もちろん油彩用の軟毛筆が使えますが、種類の多さから、右記の水彩筆などを利用するのもよいでしょう。マチエールの変化をつけたい時などは一般的な油彩筆を利用します。

また、前述の叩き筆は、すり減ってしまったブタ毛の筆の先端を切り取り、サンド・ペーパーで毛先に少し丸みを与えたものも、利用できます。

最近では、ナイロンなどの合成筆が多く出回っていますが、これも使い度があります。特に、油絵具を刷り込むように使う時などは、柔らかすぎず、硬すぎないという、なかなかの優れたものです。欠点は、使い込んでいくと毛先が広がってしまうことです。高級なセーブルなどに比べて、とても安価ですから、使い捨てと思えば大いに利用できると思います。

掲載の筆は、私がいつも使っているものですが、ベストというところではありません。当然ながら、表現に応じたものを選びます。



制作過程10：マスキング・テープを貼り、油脂分の多いテンペラ白を重ねる。



制作過程8：油彩による固有色。花；クリムゾン、ウルトラマリン、カドミウム・レモン、イエロー。ガラス器；コバルト、ヴィリジアン。レモン；カドミウム・レモン。胡桃；イエロー・オーカー。テーブル；パーント・アンバー、ヴィリジアン。壁には、油脂分を多くしたテンペラのシルバー・ホワイト。



制作過程11：テンペラ白によるハイライトと、テーブルの反射。壁にはごく薄く油彩固有色。



制作過程9：壁に油彩。ピーチ・ブラック、シルバー・ホワイト、イエロー・オーカー、セルリアン。



制作過程12：テンペラが残っている部分に、ごく薄い油彩。壁の凹凸感を強調。

「カトレアのある静物」制作の続き

前号はテンペラ白での浮き出しで終了しましたが、その上からも一度固有色を油絵具で塗ります。壁には、油脂分を増量したテンペラ（※注）で凸部の白の強調をします。かすめるようにそつと乗せ、上から油絵具で彩色します（制作過程8・9）。

ブラインド越しの光を表現したいので、マスキング・テープを貼り、油脂分を増量したテンペラをもう一度乗せます（制作過程10）。

ハイライトとテーブルの反射をテンペラ白で描き（制作過程11）、最後に薄く油絵具をかけ、壁の細部を描いて完成です（制作過程12）。

（※注）テンペラ・メディウムは全卵に等量の油・樹脂を入れていますが、大量にリンシード・オイルなどの油脂分を加えると、より油絵具に近いテンペラになります。すなわち、盛り上げなどのマチエール作りに適したものになるわけです。硬さの調節は、油脂分が多いので水では希釈できませんから、テレピンで行います。



完成作品

カトレアのある静物 F6 1999年
パネルに和紙、白垂地、テンペラ・油彩